

原 遺 跡 の 概 観

―津軽南部の終末期古墳群―

滝本 学（平川市教育委員会）

1. はじめに

原遺跡は、現在までに試掘調査も含め6次におよぶ発掘調査が実施されている。調査総面積は2,554㎡におよぶが、これら発掘調査によって得られたデータは、道路建設に伴う緊急調査や狭小・散発の試掘調査等が主体であって全体的な構造や遺構展開の様相を考察するには若干不足気味の状況ではある。

しかしながら、過去の発掘調査に加えて平成19年度に実施した試掘調査で良好な資料が加わることとなったため、新た実施された発掘調査の成果も加え情報を整理することとする。よって、ここでは現在までに実施された調査の概略を述べるとともに、遺跡の中核を成す奈良・平安時代を中心に記述する。

2. 原遺跡の位置と概略

原遺跡は、青森県平川市の北西の原地区に位置する。県道黒石―大鰐線から分岐する市道を西へ1.5kmほど進むと遺跡へと至り、付近一帯は住宅街とリンゴ園が広がる閑静な佇まいを呈している。

この辺りは、浅瀬石川によって大きく侵食されて形成された開析扇状地が分布しており、本遺跡も北側に向かって舌状に張り出した扇状地上に立地する。付近の標高は46～47mであって比較的起伏がなく極めて平坦な様相を呈しているが、旧来は南側にやや大きく傾斜する小丘状の地形であったものと考えられている。そのため、園地整備に伴い大きく削平されているものと思われる。

また、遺跡地内には「狐森」と呼ばれる直径約6m、高さ約1.5mの盛塚が残存し、盛塚頂部には付近から集められたと思われる庚申塔6基が建てられ、地元の人々によって祀られている。

遺跡が公的に認知されたのは昭和38年と比較的古いが、広く知られるきっかけとなったのは、昭和48年の春、リンゴ樹の抜根作業中に土盛塚付近から工藤仁右衛門によって腐食した刀剣が偶然に発見されたことによる。発見された刀剣は奈良時代の所産と考えられる平造りの「蕨手刀」であり、残存部分の寸法は長さ54.8cm、幅6.6cm、厚さ2.52cmを測るものとなっている。切っ先の折損と刃部の中央が部分的に欠損する以外は破損が認められず概ね原型を保っており、現在は平川市教育委員会によって保存されている。

3. 過去の発掘調査

発掘調査は試掘調査、学術調査も含め6次に及んでいる（第1図参照）。昭和62年（1987）に尾上町史編さん事業に絡み蕨手刀の出土背景を探る目的で出土したとされる地点周辺の試掘調査を実施しているが（第1次調査）確たる成果が得られないまま終了している。翌63年（1988）には、遺跡内で具体化した町道建設工事に伴い尾上町教育委員会によって緊急発掘調査（2次調査）が実施されたが、この調査で古墳（周溝）3基、竪穴住居跡1棟、溝状遺構2条、縄文時代の埋設土器遺構1基が確認

され、平成2年（1990）には、葛西勲、高橋潤によって実施された学術調査（第3次調査）で昭和63年調査部分付近の「狐森」も含め7ヶ所を調査し、10基の古墳が確認されている。

翌平成3年（1991）にも両者によって分布範囲を把握するための学術調査が実施され（第4次調査）、結果、2基の古墳が確認された。

平成13年（2001）には、遺跡の東側縁辺部、昭和63年調査地点から東側100mのリンゴ園の一角（A地点）と更に50m先（B地点）の2地点で実施（第5次調査）。A地点からは溝状遺構3条と土坑5基が検出されたが、奈良・平安期に属する遺構は検出されなかった。B地点では遺構・遺物は検出されていない。

平成16年（2002）には遺跡南西部（A地点）と西側の一角（B地点）において実施され（第6次調査）、奈良・平安期の古墳4基、時期不明の溝状遺構2条が検出されている。

4. 検出遺構と出土遺物

検出された遺構には縄文時代に属する埋設土器遺構、奈良・平安時代に属する竪穴住居跡、古墳跡、中・近世に属するものと思われる溝状遺構などがあり、出土遺物には、縄文土器（中期・晩期）、弥生土器（田舎館式）、土師器、須恵器、石器、金属製品、土製品、勾玉、中・近世陶磁等がある。ここでは奈良・平安期に属するものの詳細を記述する。

(1) 竪穴住居跡

奈良・平安時代に属する竪穴住居は遺跡北西端で1棟のみ確認されている。1号住居跡は長辺5.6m、短辺5.1mを測り、カマドは北西側の壁面に設置されている。機能時期は底面出土遺物から8世紀後半に位置付けられる。

(2) 古墳

古墳とみなされる遺構は、2次調査で3基、3次調査で10基、4次調査2基、6次調査4基の合計19基が検出されている。

これらは一様に円環状に廻らされた周溝で、2号・3号墳では南東部分が開口し馬蹄形状を呈している。全面的に精査が行われたものはないが、他も恐らく2号・3号墳同様周溝の一部が開口する馬蹄形状を呈するものと思われる。規模は4.9mから10.5mと定まりがなく統一性はみられない。



写真1 第16号古墳（6次調査・H19年度）

形態的には円形周溝を構築する際に生じた廃土を溝内側に盛り上げていたものと思われ、阿光坊古墳群（おいらせ町）や丹後平古墳群（八戸市）等の古墳と同様に墳丘裾部と周溝が接する土饅頭状を呈していたものと思われる。

さて、本遺跡で確認された古墳において埋葬施設が検出された例は少ない。2号・3号墳で埋葬施

設と思われる掘り込みが確認されているが、両者攪乱を受けており詳細は不明となっている。

一方で16号墳では埋葬施設を確認するため周溝内部を実施したものの、痕跡は認められておらず、1号墳等多くのもので埋葬施設が現時点で確認できていない。

周溝底面より浅く造られたことにより、後の削平によって消失したとの考えも可能であるだろうが、埋葬施設が検出されない事例は、阿光坊古墳群や丹後平古墳群等にもみられるため、むしろ構造的なものと考えた方が良いものと思われる。

地山面に掘り込んだ痕跡が認められないところから、あるいは墳丘内に埋葬施設を構築した可能性も否定しきれない。後世の削平により墳丘とともに消滅したとするならば、その推測も成り立つものと思われる。

古墳は出土遺物や遺構内から検出された白頭山火山灰の関係から8～9世紀にかけて造営されたとみられる。したがって本遺跡の古墳は終末期古墳と判断される。

なお、2号墳では埋葬部分と考えられる掘り込み周囲の土壌を用いて無機リン酸の含有量と残存脂質の脂肪酸組成の分析が行われているが、分析結果により高等哺乳類の埋葬が示唆されている（小山陽造1988）。

(3) 出土遺物

古墳に伴うものと思われる出土遺物は多くないが、第3号墳の周溝から土師杯が1点、第5号墳bの周溝から故意に破損させ積まれて置かれたと思われる横瓶、第6号墳の周溝から土師器杯・甕、須恵器杯、高台付杯、壺、丸玉が出土している。丸玉は透き通ったスカイブルーを呈したガラス製で直径3mmと小さく中央に径1mmの穿孔が施されているものである。これらは周溝内部の開口部に集中しており、状況から意図的な投棄とみられる。



写真2 銚（丸柄）（6次調査・H19年度）

遺構外の遺物として特筆するものに銚（丸柄）、勾玉等がある。6次調査で出土しているが後世の攪乱により遺構と伴出しなかったが、これらは明らかに古墳に伴う遺物である。丸柄は青銅製であり、津軽地方においては初見となっている。

なお、第2次調査で出土した須恵器片の蛍光X線分析を試みているが、その結果、静岡県湖西地方の須恵器の胎土の特性とほぼ同質とみられることが判明している。報告書内では湖西窯跡群が有力な産地として考えられるとしており、今後の検討課題となっている。

5. 古墳造営域と居住域について

古墳の分布範囲は、遺跡北西にある「狐盛」周辺と6次調査地点より確認されているため、遺跡南西部まで分布することが明らかとなっているが、遺跡南東部と西側で実施された5次調査においては

奈良・平安期の遺構自体が確認されていない。北東部では調査が及んでいないものの、古墳は遺跡西側に濃密に分布する傾向のようであり、比較的広域な範囲に分布すると推測されるものの、遺跡東側への展開は脆弱なものと考えられる。北東部に関しては調査未実施のため今後の調査による追加資料を待ちたい。

次に居住域についてであるが、竪穴住居跡は遺跡北西部で1棟確認されているだけで、その他の調査地点からは検出されていない。住居跡は床面から出土した遺物と堆積土中から検出された白頭山火山灰から8世紀後半に位置付けられている。この住居跡は古墳と並行するものと思われるが1棟のみに止まっている状況から本遺跡内での住居の展開は稀薄なものとして推測される。

したがって、トレンチ調査が多く面的な調査が進行していない状況下ではあるものの、この状況から古墳が分布すると思われる遺跡西部においては古墳造営域と居住域は混在されることなく分離しているものと判断される。

また、遺跡の西側に隣接する浅井（1）遺跡からは竪穴住居跡が2棟確認されている。これらは出土遺物やカマド構築方法等から原遺跡1号住居と同時期の年代が示されている。したがって、両遺跡においてほぼ同時期の竪穴住居跡が存在しており、200m程度という両者間の距離関係からいっても分離された別集団のものとは判断し難いものと思われる。このことから原遺跡の古墳造営集団の居住域は、現段階で原遺跡西側及び隣接する浅井（1）遺跡を含めた範囲である可能性が高いものと推測される。

6. 現在までの調査から

本遺跡は縄文時代から近世に跨る複合遺跡であり、遺物の出土量と遺構数から奈良・平安時代が最も隆盛したものと思われる。奈良期には終末期古墳が多数造営されるため墳墓遺跡としての性格を有している。

調査は分散して実施されており、全容を知るにはまだまだ調査面積に不足があるものの、遺跡の主体となる終末期古墳は遺跡の北西部から南東部にかけて検出されており、この範囲を中心に古墳は分布するものと推測される。それに対し居住域は古墳と混在せず両者は明確に区別されるものと思われ、最も近接する住居域としては本遺跡の西端から隣接の浅井（1）遺跡にかけて存在するものと予想される。

遺跡内に所在する盛塚（狐盛）以外にも盛塚が多数あったと伝えられていることや限定された範囲での調査に終止しているにも係らず、現在までに19基の古墳が確認されていること等から本来一帯には数多くの古墳が存在したものと推測されるが、残念なことに古墳の墳丘部分には盗掘や園地整備等に伴う削平により、ほとんど失われてしまったものと思われる。

原遺跡は津軽地方で数少ない終末期古墳が存在するものであり、この地域における終末期古墳文化を考察する上で欠かすことが出来ない重要な遺跡となっている。

また、本遺跡が所在する舌状扇状地は、浅瀬石川流域に発達した肥沃な土壌を有し、古来、人間生活を営む上で良好な条件を備えていたものと思われ、付近に李平（1）遺跡、李平（2）遺跡、五輪野遺跡、八幡崎遺跡等の同時期の遺跡が分布している。本遺跡は、地理的にこれら遺跡のほぼ中間に位置するところから、本遺跡の正しい理解のためには、隣接する浅井（1）遺跡をはじめ周辺遺跡も

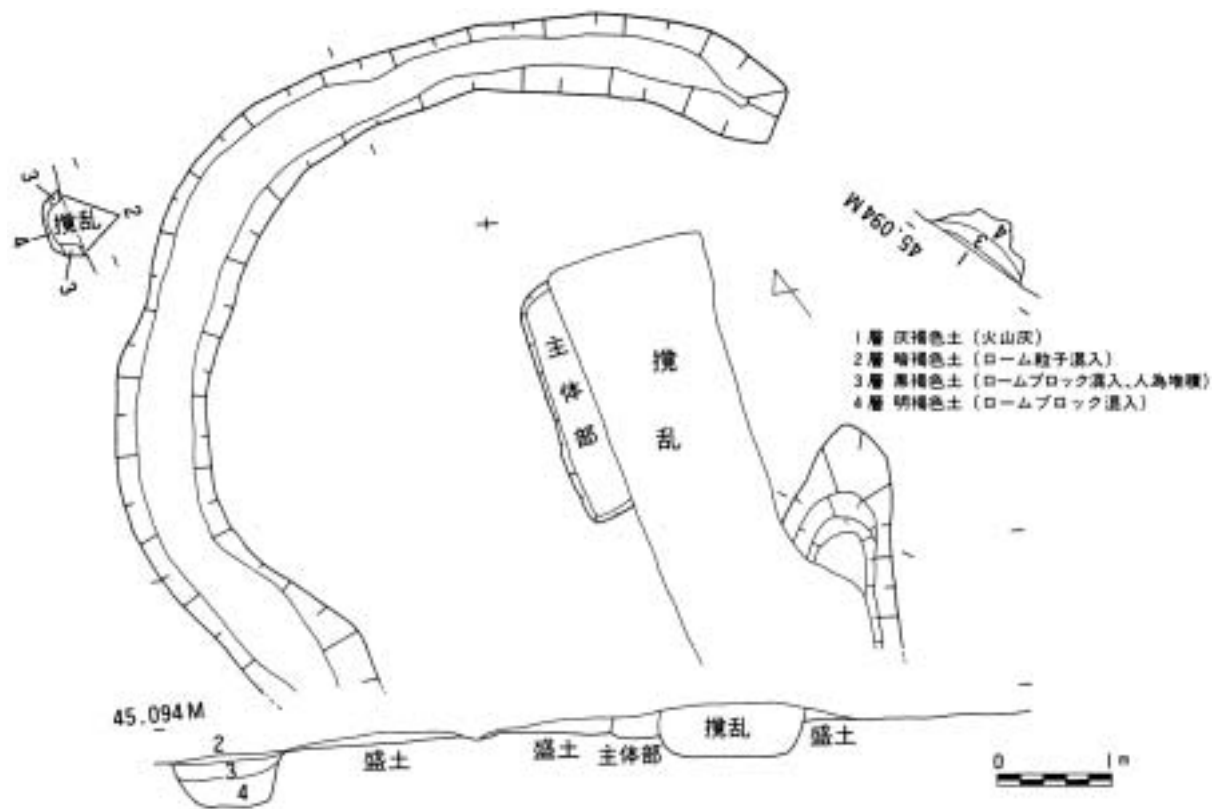
含めた広域的な検討が望まれるところである。

【引用・参考文献】

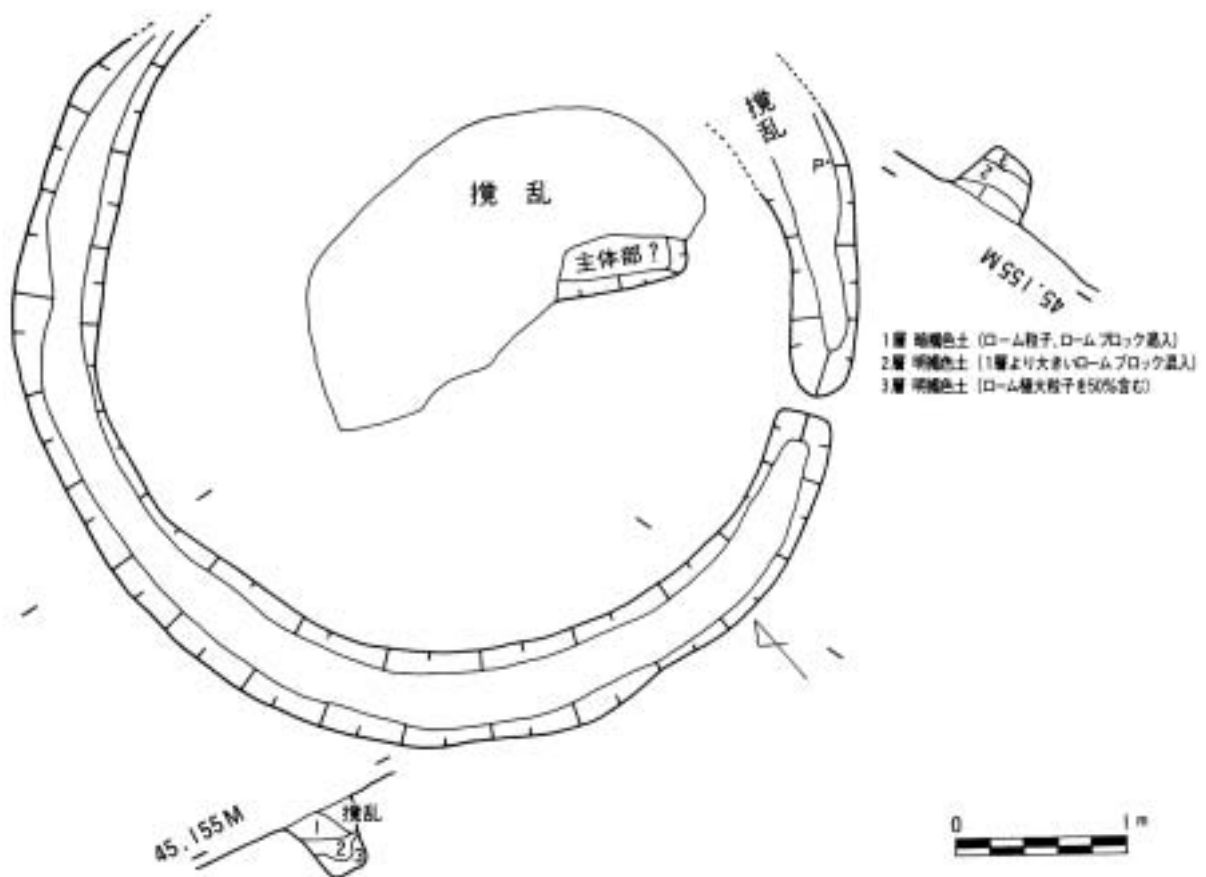
- 葛西勵・高橋潤 (1989)「原遺跡発掘調査報告書」 尾上町調査報告書第8集
尾上町教育委員会
- 葛西勵・高橋潤 (1990)「東北北部における終末期古墳の研究」
『拋糸文』第18号 青森山田高等学校考古学研究会
- 高橋潤 (1992)「東北北部における終末期古墳の研究」
『拋糸文』第19号 青森山田高等学校考古学研究会
- 高橋潤・相馬俊也 (2001)「浅井(1)遺跡試掘調査報告書」
尾上町文化財調査報告書第10集 尾上町教育委員会
- 相馬俊也 (2002)「尾上町埋蔵文化財試掘調査報告書 原遺跡 李平遺跡 浅井(1)遺跡」
尾上町文化財調査報告書第11集 尾上町教育委員会
- 長尾智寿 (2008)「原遺跡試掘調査報告書」
平川市埋蔵文化財調査報告書第3集 平川市教育委員会



第1図 原遺跡調査地点図



第2図 第2号古墳実測図 (2次調査・S63年度)



第3図 第3号古墳実測図 (2次調査・S63年度)